

ヴェネツィア・ワークショップ

廣 瀬 富 男

Buongiorno! Thank you so much for having me as the first speaker of the workshop. You may already have experienced this, but I got lost a couple of times yesterday while I was walking around the city, which is like a maze. For this presentation, however, I'll do my utmost to be as clear as possible, so that you won't get lost while I am talking. ...

最初の発表者ということもあり、何か気の利いた言葉で始めたかった。10月10・11日の2日間、生成文法系のワークショップ 'Variation in P' が、ヴェネツィアはUniversità Ca' Foscariで開催された。一捻りしたのは、恐らくはトークの名手として知られる共著者のRose-Marie Déchaineが現れると踏んでの発表順だったのだろうと勘ぐり、会場に居もしない彼女の向こうを張ったのである。

今回の発表は、アルゴンキアン語族のBlackfootとPlains Creeの前置詞要素の統語分析で、ワークショップ・テーマとしての問いの一つ、「(微視的) 比較言語学的データは、前置詞句の内部構造および節構造との関係についての我々の理解をどのように深めることができるか?」に直結した内容である。Plains Creeの前置詞要素が「語彙的」であるのに対し、Blackfootの前置詞要素は「機能的」かつ「直示的 (deictic)」で、それが故に、「変異 (mutation)」を起こし、前置詞句と並行

的な内部構造を持つ節の時制要素の位置に生じる、そういう主旨で20分ほど話をした。その後、幾つか質問を受けたが、Guglielmo Cinqueからは、BlackfootとPlains Creeの違いが「巻き上げ式の (roll-up)」移動の有無に由来する可能性について尋ねられ、あまりの「らしさ」に思わず笑みがこぼれた。結局、幾つか理由を挙げ、やんわりと否定したのだが、この著名で、好々爺然とした言語学者のすこぶる我田引水的な発想がたまらなく愛



どちらに向かっても、行き着く先は...

さて、自分の発表が終われば、緊張も解れ、あとは残りの発表に耳を傾けるばかり。2日間でポスターを含めても1ダースと少しの発表の中、やはり一番面白かったのは、Peter Svenoniusの基調発表で、前置詞の「拡大投射 (extended projection)」を構成する機能範疇は、その数や種類は言語間で同一であるが、拡大投射を構成する主要部になる言語と、そうでない付加詞になる言語があると主張する。これは、Cinque流の cartography に一石を投じる仮説で、筆者自身の名詞の拡大投射の捉え方に通じるものでもあり、今後の

一つ嬉しいことがあった。発表後の休憩中にスペイン人大学院生の Juan Romeu Fernandez から「お前は、あの Hirose 2007 のヒロセなのか？ Li squib の？」と訊かれ、そうだと答えると、「あれを基に博士論文の1章を書いた。あと一週間か十日で書き終えるから、出来上がり次第、メールで送る」と言う。案の定、それっきり連絡はないのだが（笑）、若手研究者からこんな風に声を掛けられると、先にこの分野を志した者の役目を少しは果たせたような気がするのである。

ギター・レッスンと英語習得

ギター習得と言語習得との一番の類似点は、音楽演奏や英語を「よく聴く」ところから始まる点である。英語教育部門では、初期の段階では「話させる」ことを意識的に遅らせ、「聴かせる」ことに重点を置く理論もあるくらいである。ギターレッスンでも、CDに収録されている演奏を聴くことから始まると思うが、実際の音楽教室でのレッスンは、音出しから始まる。レッスンでは、いきなり左手でコードを学び、左手でピックを使いリズムを取りながら、「アウトプット」の練習に徹する。しかし、教師の「曲を知れば、合わせやすくなる」というコメントからも、レッスン以外に練習曲を「インプット」する必要性を説いているに思える。しかし、音楽教室では時間的制約

第3の共通点は、順序よく配列されている教材

である。初期のレッスンでは、初めに左指を使ったG、Em、Cの3つのコードを学び、次にその組み合わせとしてG-Em-C-Gの連続を、右手に持ったピックを使いながら、ある一定のリズムで練習する。その後、すぐにそれらのコードを含む曲をCDに合わせながら演奏する。短い言語の単位を学び、それらの連続したフレーズや文、さらに段落を音読させられる学習過程に似ている。これが可能になるのは、教材の配列が十分考慮されているからであろう。すなわち学んだ数個のコードとそれらのコードの連続をマスターすれば、ある曲に挑戦できるように教材が配列されている。フォークソングが全盛期だった学生時代に購入したギター入門書とは、雲泥の差である。当時の教材は、メジャー・コード6個、マイナー・コード8個、セブンス・コード7個が初めに紹介され、その後に約30曲の楽譜がコード付で載っている。数個のコードの指の位置などは自学自習できても、教本に載っている1曲も弾けないまま挫折してしまった過去がある。一つ一つの練習が次の練習につながるという教材の配列の重要性は、英語教育の教材配列にも通じるものがある。

第4の共通点は、「螺旋状的」練習方法である。完璧なコードや言語音をマスターできなくても、さらに高度なレッスンに進む。しかし、そこにはマスターし切れてないコードや言語音を、新しいコードや音と共に螺旋状的に何度も復習する方法を採用している。音楽教室でのギターレッスンを振り返ると、個々のコードをマスターできず、未だ「きれいな音」が出せないにもかかわらず、どんどんカリキュラムは進み、曲までやらせるのは、少々無理があるのではと考えた。その時、ふと学生時代における/r/と/l/の練習を思い出した。当時これらの子音を一晚中懸命に練習したが、完全にマスターしたとは言えなかった。しかし、次の子音や母音の練習へどんどん進んだ。幸い新し

い教材は、前に習った未修得のコードや言語音をも含むので、何度も螺旋状に復習することになっていた。さらに、自宅での自主練習で気づいたことは、コードをきれいにしなくても、次のコードの練習に移らなければ、永遠にGコードの指練習に終始してしまう恐れがあるということ。それでは、結果的に飽きてギター練習の中断につながると思った。すなわち、一つのコードさえできないという絶望が、過去40年間に幾度もギター練習を中断させた原因だったことに気づいたのである。

今回ギターのグループレッスンを通して学んだことと言語習得論の一端を関連させると次のようになる。現在の自分のレベル、すなわちGコードだけでも完璧にできない技量なのに、それを含むコードの連続音を要求されることは、確かに大変なことである。しかし、自分がさらに上に伸びるのには、「限界と思う時に、より複雑な練習をもう一押し強要すること」が、技量習得の必要条件であると気づいた。言語習得分野で扱われているKrashenの「入力仮説」すなわち「 $i+1$ 」と呼ばれるインプットの必要性、言い換えると、自分のレベルより一つ上の理解可能なインプットを受け続けることは言語習得の上で必要であること、またSwainの「出力仮説」、すなわち、不正確な表現をした学習者に対して、より正確な表現を強要、プッシュする必要性を説く仮説、さらにVygotskyの「ZPD」は、自分より上の能力を持つ人との共同作業により自分だけでは達成できないレベルの課題が達成できるという理論に通じるものがある。

一つのコードも「きれいに」出せないのに、どんどん次のコード練習に進み、さらに曲までやらせる教師の練習生への期待度の高さに、「ちょっと待ってくれ、私は初心者だ！」と叫ぶ自分がいた気がする。しかし、言語習得理論の一端から判

断しても、さらに次の段階へ進む上で、学習者の到達目標を高く掲げ、到達達成への教師の期待度を高く維持することで、練習生の次なる技量レベルにつながるのだという考えに変わっていった。結論として、完璧主義にこだわるより不完全でも

継続的に「限界を突き破る練習」に従事する姿勢、かつ到達目標を高く維持する「教師の期待度」こそが、ギターならびに語学の習得に重要な要因と考えるに至った。

言語研究センター共同研究

機能素性と節構造の関係

佐藤裕美／辻子美保子／加藤宏紀／片岡喜代子／相原昌彦

テンス、モダリティ、極性や節タイプなどに関わる節の左方周辺部の構造について、英語、日本語、中国語、スペイン語、イタリア語などに見られる現象の考察から、左方周辺部の機能範疇とその構造、また節構造全体との関連を明らかにすることを目的としている。

7月31日(水)に第1回研究会を開催し、‘Complementation and Merge: Propositional Attitude

Infinitives in English’の発表(発表者:佐藤)とディスカッションを行った。11月20日(水)に第2回研究会を開催し、加藤氏が「小節理論分析に基づく現代中国語の動詞結果補語構造の考察」の研究発表を行った。また、2014年1月には秋田大学の上田由紀子先生をお招きし、講演会を開催した。

言語研究センター共同研究

音響機器等を利用した 英語音声教育のための予備的調査

小松雅彦／松村文芳

近年、技術的な発達によって、さまざまな音声分析のための機器が従来に比べて廉価で利用できるようになってきている。しかしながら、それらは、おもに研究者が研究をするために用いられており、音声教育への応用は限られている。一方、英語教育においては、音声教育の重要性は認識されているが、効果的な教育ツールは十分に開発されているとは言い難い状況にある。

本研究プロジェクトは、音響機器等を利用した英語音声教育教材を作成するための予備的調査を行うことを目的としている。現在利用可能な技術が、英語の音声教育のための教材開発に利用可能かどうかを調べる。

音声教育のための技術・知見には、個別言語の音声に特化したものもあれば、多くの言語の音声教育全般に関わるものもある。本プロジェクトで

初年度である本年度は、次の項目を中心に作業を行っている。

- (1) 調音位置の可視化を行うと同時に、調音位置と音声信号の同期を取ることでできる Aurora Wave Speech Research System (アドバンス

トシステムズ株式会社)の操作性等を調査し、音声教育のための基礎的な教材作成ツールとしての有効性を検討している。

- (2) ストリーミングサーバを利用した英語音声のディクテーションの演習システムのプロトタイプ作成のため、サーバ環境の整備やソフトウェア導入などを行っている。
- (3) 中国語音声の波形を見ながら発音の練習をするCALLシステムを使用しながら、英語の音声教育との関連・応用を検討している。

言語研究センター共同研究

スペイン語の学生の動機づけに関する調査

Arturo Varón

我々の研究グループは、スペイン語学科に2010年度に入学した学生を対象にそのモチベーションの変化を追跡する調査をこれまで行ってきた。対象学生たちが卒業を迎えるに伴い、その調査も今年度をもって終了する。我々は2013年12月から2014年1月にかけて最後のアンケートを実施し、これまでのデータをもとに在学中に彼らのスペイン語学習へのモチベーションがどのように変化したかを分析・考察する予定である。

来年度から我々の研究グループは日本の大学生向けのスペイン語学習用テキストはどうあるべきかについての研究を行うこととなった。海外で出版されるテキストは、明らかに西洋文化圏の一般的な成人学生のことを考えて作られており、日本の大学生の学習環境や年齢、社会文化な事情や教育上の問題などは考慮されていない。我々の研究グループが言語センターで新しいプロジェクト

「スペイン語を専攻する学生のための教材研究」
をスタートさせるのはこうした理由による。

大学に通う世代の学生にとってより自然なコミュニケーションの場面を設定し、その中でスペイン語の文法で学習したことと実践が適切な形で結びつけられるようにテキストを工夫していくことが必要である。しかし、我々の最終目標は単に言語を身に付けることではない。我々が目指すのは、学生が自分の将来のために次の3つの意味で言語学習の中心人物、すなわち、ヨーロッパ言語共通参照枠の概念を援用すれば、①言語の体系を知り、様々なシチュエーションでそれを使いこなす「社会的に行動する者／社会的主体 (social agent)」、②学習する言語の持つ文化的な要素を理解する「異文化間話者 (intercultural speaker)」、そして③大学が終了した後も自己の責任で自主的に学習を続ける「自律した学習者 (autonomous learner)」となることである。

新しいプロジェクトは、スペイン語学科の2年生向けの会話クラスのためのテキストを作成することから始まる。これが優先順位で一番上にあるのは、2年次がスペイン語学習にとって非常に重要な学年であるにも関わらず、それを指導するための適切なネイティブクラス用のテキストを見つけることが非常に困難であるからである。これまで行ってきた学生のモチベーションについての調査で得た経験やその分析結果はこの新しいプロジェクトにも十分に役立つことだろう。我々はこの新プロジェクトが学生にとっても教員にとっても実り多きものになることを期待している。

けることが非常に困難であるからである。これまで行ってきた学生のモチベーションについての調査で得た経験やその分析結果はこの新しいプロジェクトにも十分に役立つことだろう。我々はこの新プロジェクトが学生にとっても教員にとっても実り多きものになることを期待している。

言語研究センター共同研究

新漢語水平考試 4 級問題を利用した 中国語自動学習システムの開発

加 藤 宏 紀

本研究グループでは新HSK（新漢語水平考試）4級の問題を題材とした自動学習システムを開発している。本自動学習システムは、サーバ・クライアントシステムを採用し、ネットワーク内で学習者が個々の要求に応じて、自由に中国語学習を進める環境を提供している。

新HSK4級は「聞き取り」、「読解」、「作文」の三つのパートからなり、1200語程度の単語および常用の文法をマスターしているレベルを対象と

している。

現段階では、新HSK4級の「読解」と「作文」の問題をモデルに自動学習を可能にするためのプログラムを作成している。また、正解を表示するだけでなく、その解説も書き加え学習者の自動学習をしやすいシステム作りを検討している。

今後は「聞き取り」の問題をモデルとするプログラムを作成し、各パートの問題をさらに増やし、中国語自動学習システムを充実させていく。

言語研究センター共同研究

『良友』画報と上海租界研究

孫 安 石

本共同研究は1926年～1945年の間、上海で発行された『良友』画報の多様な内容を、専門領域を超えた学際的な視点からとらえ直すことを目指すものである。上海で発行された『良友』画報に関する研究成果としては、1930年代に同雑誌の編集を担当した馬国亮が出版した『良友懐旧』

（2002年）が最新の先行研究である。しかし、中国以外の国ではまだこの画報を全面的に分析した研究は発表されていない。1926年に創刊された同雑誌は、中国の政治、経済、社会、文化はもちろん、文学、広告、漫画などあらゆる分野を網羅している。とくに、この画報が創刊された1920

年代はアジアで大衆消費社会とも言うべき社会現象が幅広く見られた時期で、映画や百貨店などが登場する時期とも重なる。本共同研究はこの『良友』画報を精読する輪読会を続けながら、2004年8月にはワークショップ『『良友』画報と上海』（上海）を開催し、2007年9月には雑誌『アジア遊学』に『良友』を取り上げた特集号（勉誠出版）を出版することができた。さらに、2010年1月には菊池敏夫「上海の百貨店業界と近代中国」（臨時研究会）を開き、8月には上海市檔案館、上海市図書館などを訪れ、『良友』画報関連の資料調査を行うことができた。本年度に実施した共同研究関連の報告は以下の通りであった。

(1)2013年度・第1回 租界メディア班の研究会

◎日時：2013年5月24日（金）

◎場所：横浜キャンパス21号館405会議室

◎共催：神奈川大学非文字資料研究センター租界とメディア班、『良友』画報研究会

◎内容：

- （一）「民国期上海メディアの香港における“転生”－戦中、戦後の『良友』画報から－」（村井寛志）
- （二）韓国国民大学中国人文社会研究所のシンポ「現代中国知識網絡的動力」の報告（孫安石）

(2)2013年度・第2回 租界メディア班の研究会

◎日時：2013年7月25日（木）

◎場所：横浜キャンパス21号館405会議室

◎共催：神奈川大学非文字資料研究センター租界とメディア班、『良友画報』研究会

◎内容：

- （一）「上海の日本語新聞『上海新報』がみた中国（Ⅰ）」（孫安石、神奈川大学）
- （二）「大連の中国語新聞『泰東日報』と植民地都市のトボス」（橋本雄一、東京外大）
- （三）「大連の歴史地図の作成について」（木之内誠、首都大学東京）

(3)2013年度・第3回 租界メディア班の研究会

◎日時：2013年10月18日（金）

◎場所：横浜キャンパス21号館405会議室

◎主催：神奈川大学非文字資料研究センター租界とメディア班

◎内容：

- （一）「東亜同文会の資料からみる租界関連の記事－上海、漢口、杭州など（大里浩秋、神奈川大学）」
- （二）「Legendary Sin Cities : Paris, Berlin & Shanghai」の上海部分の検討（孫安石、神奈川大学）

言語研究センター共同研究

韓国語と日本語の「条件」を表わす表現の対照研究

尹亭仁／久田和孝／車香春

本共同研究では、「条件・仮定・前提」などを表わす韓国語の表現「V-(으)면」・「V-더니」・「V-자」と日本語の表現「V-と」・「V-ば」・「V-たら（なら）」の用例を、同じテーマで企画され、書かれ

た小説『사랑 뒤에 오는 것들』（孔枝泳）と日本語翻訳本、『愛のあとにくるもの』（辻仁成）と韓国語翻訳本、全4冊から集める作業を進めてきた。『사랑 뒤에 오는 것들』からは関連表現を129個

(対応する日本語翻訳本からは117個)、『愛のあとにくるもの』からは関連表現を147個(対応する韓国語翻訳本からは115個)集めた。両方の小説で、韓国語の場合は3つの表現の中「V-(으)면」が114個、100個と圧倒的に多く用いられていることが分かった。しかし、日本語の場合は文脈によって3つの表現が多様に用いられており、さら

に両言語において対応しない例も2割近く見られた。このような多様な対応の様相が両言語の学習者に混乱を来たしているのである。現在、今回集めた用例を時制・人称・従属節など文法的条件を加えながら分析を行ない、それぞれの表現の使い分けの理論的根拠をまとめる作業を進めている。

言語研究センター共同研究

外国語学習・教育における レアリアの内容と位置づけに関する研究

堤 正 典

外国語教育におけるレアリアの研究を行っている。レアリアは当該の言語文化に関する知識のことで、その言語運用を支えるものである。このような知識がないと実際の使用に支障が生じ、ついには言語学習にも支障が生じる。外国語に接していると、文面上の意味は分かることは分かっても、文化的背景等を理解していないと実際の意味するところが分からないことは多々あり、軽んじることのできない問題である。

実際の教育の場面で、どのような内容をどのような段階で導入するかは、他の教育内容・教育課題と同様に検討する必要がある。しかし、残念ながら、現在の研究状況では、レアリアの具体的教育内容については十分に把握ができていない。

ある表現をしようとするとき、いくつかの単語を組み合わせると文を作ったとしても、必ずしもその場面にふさわしいものができるという保証はない。例えば、空腹で食事をしたいことを伝えたいときに、ロシア語で я хочу (私は～したい) と есть (食べる) を組み合わせたとすると、実際には小さな子供が言うような文になってしまう。

それぞれの単語は、学習の比較的初期の段階で出てくる基本的な語であるが、この組み合わせで作られる分は場面にふさわしいものではない。「食べる」を意味する別の動詞 кушать であればよいとされる。しかし、こちらの動詞は初期段階で導入されていないことが多い。

このような例を、多数集めて、学習者に提示できるようにすることも、レアリアの一環といえよう。これも現状の一つの課題である。現段階では、どのような問題が存在しているかを洗い出している状況であり。具体的な教育内容を検討するのは次の段階の作業となるだろう。

他の言語教育、特にフランス語教育での現在の状況を知ること、大いに参考になり、有益に機能している。

なお、今年度は現在ロシアで教鞭をとる小林潔氏が、インターネット会議システムを用いて講演をしてくれた。ロシア語教育に関するレアリアについて、現地での最新の情報等を盛り込みながらの講演であり、非常に興味深く拝聴することができた。